

捨てることのできない神

ホセア書11章

エフライムよ、どうして、あなたを捨てることができようか。イスラエルよ、どうしてあなたを渡すことができようか。……わたしのあわれみは、ことごとくもえ起っている。(8)

神とイスラエルの民との関係を夫婦の愛にたとえて語ってきましたが、ここでは子どもに對する親の愛にたとえて語っています。

親が子を愛するように、主なる神はイスラエルの民がどのように背こうとも、彼らに對する愛は変わらないということです。神に背き続けるイスラエルの民は、神の義からみれば捨てられて当然の状態でした。「エフライムよ、どうして、あなたを捨てることができようか」という主の叫びは、主の内面的な葛藤を表しています。捨てられて当然のイスラエルの民を主は決して捨てることなどできないということです。ここに出てくる「アデマ」や「ゼポイム」とは、ソドムとゴモラと一緒に神の裁きを受けて焼き滅ぼされた町の名前です。イスラエルの罪はそれらの町と同じように深いけれども、彼らを愛する主の思いはいよいよ激しく燃えているということです。わたしたちは自らの罪深さに絶望し、「こんなわたしを神がどうして赦してくださいさるだろうか」と思ってしまうことがあります。けれども主は、同じ「どうして」を使いながらも、「どうして、あなたを捨てることができようか」と言われるのです。

わたしたちは自らの罪深さに打ちひしがれてしまふときも、わたしたちを決して捨てることのない神の憐れみを信じて、主の赦しを祈り求めようではありませんか。